

## 芥川龍之介論

和田 勉

芥川龍之介は、人間のエゴイズムや動物的な側面を嫌悪し、それを小説のテーマともした。だが、それだけでなく、遺伝子にプログラムされていること、つまり産めよ生きのびよという生活者の論理にも否定的だった。そのことと関わりのあると思われる作品を、年代順に挙げながら分析したい。

芥川が恐れたのも、個人が主体であるよりも、種や遺伝子こそがむしろ主体であり永遠なのではないかというようなことであろう。そこには、種の継続に奉仕するような形で、生活や社会が成り立っているのではないかという思いもあっただろう。ヒトは有性生殖をする生き物である故に、種に従属した要素を持たざるを得ない。このようなことが、人生の理不尽さへの認

識にもつながっていたと思われる。

ところで、唐木順三は「芥川龍之介論」（『日本文学研究資料叢書 芥川龍之介II』所収、昭52、有精堂）の中で、「理性と本能の相剋矛盾こそ、芥川の理解した人生そのものの姿である」と述べている。この論は芥川の本質をついた優れたものだと思われる。ただし、本稿では、「理性」と対極に置かれた「本能」ということについて、個人という枠を越えた種や遺伝子の継続という視点から検証する。

芥川の所謂エゴイズムへの嫌悪を、ドーキンスの『利己的な遺伝子』（平3翻訳、紀伊国屋書店）や養老孟司の『唯脳論』（平1、青土社）等の分子生物学や脳科学などを視座とすることで捉え直してみたい。ドーキンスの『利己的な遺伝子』は、行動や進化において、個体や種に注目するのではなく、遺伝子の側から見たところに独自性があった。同様に芥川の文学を、個人のエゴイズムという観点だけではなく、種という概念からも捉え直すことを意図する。そのことで、芥川文学の一面を照らし出すのみならず、芥川文学の持つ先見性についても言及したい。この試みによって、従来ほとんど触れられなかった芥川文学における生物学的な視点を明らかにし、その視点から芥川の文学活動を生涯にわたり捉え直すのがねらいである。このような視点から、「羅生門」や「河童」などの諸作品についても読み返してみたい。芥川は自己の作品がどのように解釈され、評価

されるかにこだわったが、理知的な作者らしい仕掛けも試みている。

芥川を遺伝子の視点から捉えるというのは、敢えて奇を衒おうとする意図からではない。芥川は遺伝ということに深く関わった作家であり、母親の狂気の遺伝ということに生涯にわたり怯えたと言える。それは、先祖から引き継ぐ血脈ということについて、強い関心を持たせたと思われる。それだけでなく、種や人間や生活というキーワードで芥川を捉えようとする、現代の分子生物学などが明らかにしたヒトの生態と重なる部分が多いように思われる。

二

それでは、年代順に芥川の活動を見ていきたい。明治四十四年、芥川十九歳の山本喜誉司宛書簡に、「種の為の生存、子孫をつくる為の生存、それが真理かもしれないときへ思はれる。外面の生活の欠陥を補つてゆく歓楽は此苦しさをわすれさせるかもしれない、けれども空虚な感じはどうしたつて失せなからう。種の為の生存、かなしいひゞきがつたはるぢやアないか。窮極する所は死乎」とある。これは、ドーキンスの『利己的な遺伝子』（一九七六年）の「われわれは生存機械——遺伝子という名の利己的な分子を保存するべく盲目的にプログラムされたロボ

ット機械なのだ」という言説と類似している。どちらもヒトを主体として捉えるよりも、種や遺伝子を主体として捉えている。ドーキンスでは、ヒトよりも遺伝子が主体であり、ヒトは遺伝子を後世に運ぶための乗り物にすぎないと捉えている。一方、芥川は、各人の個性よりも、ヒトが「種の為の生存」を余儀なくされていることに空虚感を覚えているのである。

芥川の知性は、ヒトの存在が「種の為の生存」であることを見抜きながら、性欲を否定することが自己の存在の意義の否定にもつながりかねないことを見抜いていた。「聡明を求めて却つて聡明のために苦しんでゐる」（同書簡）というように、知性的に人生を理解することが、自己の生を「種の為の生存」かという形で問い詰め、己を切る両刃の剣と化していた。有性生殖をする生き物の死と性の実相を、自己に引きつけ考察していたことが窺える。

「春の心臓」（大3・6）はイエーツの作品の翻訳ではあるが、芥川の特質が窺える。主人公の「十七歳の少年」は、「神様が其無量の知恵をありとあらゆる生き物にお分ちなさいました」と言う。辺りには、「次第に鳥が唄ひはじめた。かくて砂時計の最後の砂が落ちてゐた時に、忽ちすべてのものは其音楽を以て溢るゝやうに見えた。これは其年の中の最も美しい、最も生命に満ちた時期であつた。そして今や何人も其中に鼓動する春の心臓に耳を傾けることが出来たのである」というように、春が到

来する。あらゆる動植物、つまり神によって作られた生き物の活発な生命活動に焦点が当てられている。

だが、主人公の少年がこのように生命を賛美する一方で、不老不死に憧れた師匠の思いもかけぬ死に遭遇するところに、この作品の特質はある。師匠である老人は、「己は数世紀に亘るべき悠久なる生命にあこがれて、八十春秋に終る人生を侮蔑したのだ。己は此国の古の神々の如くにならうと思つた」というように「悠久なる生命」に憧れ、断食や戒行を行つていた。だが、不老不死の夢は、叶わなかつた。青年期に老年や死を含めた人生の意味をすべて解明したいというところは、まさに初期の芥川の関心の在りようを顕著に示している。

「青年と死と」（大3・9）では、死神である「男」は、「己はすべてを亡ぼすものではない。すべてを生むものだ。お前はすべての母なる己を忘れてゐた。己を忘れるのは生を忘れるのだ。生を忘れた者は亡びなければならぬぞ」と言う。この台詞は、あらゆる生命活動を司どっている全能の神を連想させる。二人の青年のうち、Bは性の快樂に耽り死を忘れてしまったせいで、滅びてしまう。あらゆる生命体に死がインプットされており、性の快樂に耽ることは許されず、死こそむしろ主体であることが、死神である「男」を通して表出される。一方、快樂の裏にいつも死を予感していたAは、救われる。Aは死神に向かつて、「お前の顔がだんだん若くなつてゆくのが見える」と言うが、

ここには死神こそ永遠なるものであり、生命の連続と蘇生がイメージされていよう。死神の「事によると『ある』と云へるのは己ばかりかも知れない」という台詞も、そのことを示しているよう。

有性生殖をする生命体の活動を司る遺伝子には、死がプログラムされていることは現代の分子生物学によつても明らかにされている。有性生殖をする生命体にとっては、性と死によつて命の連鎖と蘇生が行われているのであり、芥川は大乗仏教註1などに拠りながら、直観的にそのようなことを捉え、関心を持つたのであろう。

「羅生門」（大4・11）では、老婆は、下人から羅生門で何をしていたか問い詰められて、「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢かっちにせうと思たのぢや」と言う。老婆は鬢を売つて生計を立てるといふのである。だが、その際の下人の反応は、「老婆の答が存外、平凡なのに失望した」ということである。多くの鴉が「門の上にある死人の肉を、啄つひばみに来る」ような所であるから、人間にあるまじき行為がなされていたのではないかと下人は推察したのである。だが、老婆の生活者の論理を前に、下人は失望する。生活者の論理とは、ともかく生きよという生存本能、遺伝子にインプットされている論理と言ひ換えることもできよう。そのようなものへ「冷な侮蔑」も覚えてしまうのである。

下人が幻滅したのを敏感に察知した老婆は、「わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずゝに切つて干したのを、干魚ほしうをだと云うて、太刀帯たてはきの陣へ売りに往んだわ。疫病えやみにかゝつて死ななんだら、今でも売りに往んでゐた事である」と述べる。「髪を抜いた女」は、人間社会そのものの象徴のような存在と見てよく、あとは推して知るべしということだろう。「こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ」という老婆の台詞が、そのことを明瞭に示している。老婆は個人のことから、人間社会全体がそのような生きるためには手段を選ばない動物の論理で成り立っていると主張して、自己を正当化する。老婆の実相を臆面もなく披瀝すること、青年を威嚇し、優位な立場に立とうとする意図が窺える。この老婆の言葉は、したたかな大人の処世術を、書生じみた青年に教唆するという側面も持っている。生き延びよという遺伝子にプログラムされたものを、苦悩する知的な青年に伝えるという要素と言ひ換えてもよい。老婆の論理を逆手に取るような形で、「下人」も結局は生存本能、つまり遺伝子にプログラムされているものを前面に出すことになる。あるいは、自己の内にインプットされた遺伝子のプログラムに従う「勇氣」を獲得することになる。人間社会でまかり通るしたたかな処世術を引き受ければ、手段を選ばないので滅びることは少なくなるかも知れないが、個人の尊厳は脅かされる。

因みに、養老孟司は『唯脳論<sup>注2</sup>』の中で、「性と暴力とはなにか。それは脳に対する身体の明白なる反逆である。これらは、徹底的に抑圧されなければならない。さもなくば『統御』されねばならない。いかなる形であれ、性と暴力とは徹底的に統御されるべきである。それが身体に関する脳化の帰結である」と述べている。これを「羅生門」に援用すれば、ヒトは脳(知性)を進化・発達させることで、人間らしさを顕著なものにした。だが、脳に抑え込まれていた身体(遺伝子)が老婆の一言で目覚め、脳に反逆したことになる。

養老は『毒にも薬にもなる話』(平9、中央公論社)の中で、「社会は脳が作るが、その脳は遺伝子が作る。したがって、生物学的に言えば、歴史の理論的分析は、この二つの情報系に還元する。たとえばいわゆる治世とは、基本的には脳という情報系優位の社会であり、乱世とは、遺伝子という情報系優位の世界」と述べている。これを「羅生門」に適用すれば、老婆は「遺伝子という情報系」にいて、下人は「脳という情報系」から「遺伝子という情報系」に動いたことになる。仕事を失い、盗人になるより他なくなつた下人は、乱世を生き抜くことを余儀なくされ、生存本能を前面に出さざるを得なくなつたのである。だが、これは、一時的であるにせよ、人間らしい知性の後退である。

着物を剥ぎ取られた老婆は「裸の体」となっており、これは

まさしく知性的な人間であるよりも、動物的な人間であることを象徴的に示していよう。まさに老婆の本来の姿が露見していることになる。いざとなれば人間皆同じと考えていた老婆の本質が、視覚的に露わにされていると言える。「猿のやうな老婆」については、「鶏の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕」「肉食鳥のやうな、鋭い眼」「鴉の啼くやうな声」「墓ひまきのつぶやくやうな声」というように、まさに動物的な存在であることが比喻によっても示されている。同様に下人についても、「犬のやうに棄てられてしまふ」「猫のやうに身をちぢめて」「守宮やもりのやうに足音をぬすんで」というように、思索の一方で動物的な存在であることを示す比喻が用いられている。

人間社会全体が、必ずしもきれいごとだけでは済まされない、そのような動物の論理で成り立っていることをイロニカルに表出して見せたところに、青年芥川の「愉快げんご」な気分が込められていると見ていい。人間はまだ進化の途中でしかないとき直つてみせたのである。芥川において、「人間」という言葉は、動物的であることと知性的であることとの二項対立が常にあつた。

更に言えば、「羅生門」では、動物に等しい人間の生存本能のみならず、人間を含めたあらゆる生命体の実相を描いたと捉えることさえ可能だろう。つまり、「生物学が、生命とは将来にたいする見通しなどまったく出発した系であつて、ただやみくもに突きすすむほかに途のない、いわば『その日暮らし』

のやりくりを重ねている危うい存在であることを示している」というようなことを、限界状況に置かれた二人の人間を含めて表出したことになる。この場所には「鴉からす」が死人の肉を啄みに来るし、「蜘蛛」は天井裏に巣をかけている。「狐狸こり」や「蟋蟀きりぎりす」も、ここを生活の場としている。先に挙げた比喻に見られるように、この二人は動物に等しい生存状況に置かれており、つまりは「羅生門」では、鴉や蜘蛛などを含めたあらゆる生き物の生存の裸形が描き出されているだろう。

大正六年頃の未定稿「天狗（仮）」には、「私は阿闍梨の偽善を期待してゐました。私は阿闍梨の口から、手づよく性欲を否定して貰ひたかつたのです。さう云ふ事に苦まされる者を人畜のやうに貶めて貰ひたかつたのです」とある。「天狗」では、性欲を否定する思いと肯定する思いの葛藤が表出されている。テーマが通俗的で、登場人物よりも性に焦点を当てすぎたことが、完成に至らなかつた要因であろう。

「女」（大9・5）では、雌蜘蛛を主人公にして、蜂を食い殺し、卵を産み、子孫を残す姿を描き出している。最後は、「天井の下に、天職を果した母親の限らない歓喜を感じながら、何時か死に就いてゐたのであつた。——あの蜂を噛み殺した、殆ど『悪』それ自身のやうな、真夏の自然に生きてゐる女は」と結びられている。そこは「産所さんじよと墓とを兼ねた」、まさに生と死の両義的な空間そのものであつた。

表題が「女」と記されていることも示唆的である。単に生き物としての昆虫のことを指すだけでなく、芥川の女性観もここには投影していると見てよいだろう。子孫を残す母親の喜びと、その役割を終えた後の安らかな死が描かれている。生きている間は、子孫を残すために他の生き物を殺生するという「悪」も平気で行っている。食欲を「悪」と捉え、「殺戮と掠奪とに勝ち誇つてゐる蜘蛛」と形容しているのは独特であり、「羅生門」において生存欲は悪であるかと問う視点と通底するところがあるだろう。

出産を終えて、生き物としての使命を果たした後の安らかな死を描いているところにこの作品の特質がある。また、生命体は子孫を残せば役割を終え、潔く死すべき存在であることが示されている。生物の中にプログラムされている生と死について図式化したような作品である。生命の燃焼が最も感じられる「真夏」を背景として女蜘蛛の死を描いているところもイロニカルである。因みに、この大正九年八月四日の滝井孝作宛書簡に、「僕は肉食交合二つながら絶縁だ」とあり、私生活では、本能と知性の対立があつたことが分かる。

「母」(大10・9)には、「女は敏子の心もちに、同情が出来ない訳ではない。しかし、——しかしその乳房の下から、——張り切つた母の乳房の下から、<sup>わうぜん</sup> 汪然と湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかつた」とある。つまり、子供を病気で亡く

した敏子に同情しながらも、「女」は、本能という遺伝子のプログラムに操られているかのように振る舞つてしまうのである。知性よりも、身体にプログラムされたものの方が前面に出てしまうのである。敏子の夫が、波止場では「仔豚の群も、長長と横たはつた親豚の腹に、乳房を争つてゐるかも知れない」と思うところにも、動物の本能が連想されており、細かな描写でありながら、母性本能を強調しようとする作者の意図が窺える。

三章では「女」の赤ん坊も亡くなったことを知り、敏子は冷酷な微笑を浮かべる。お互いに「母」であることで張り合い、他人の不幸にむしろ勝ち誇つた気分を味わうところに、この作品のテーマはあつたと言えよう。知性よりも母性本能の方が、大きな要素を占めているという作者の考えが反映していると見ている。なお、「女」には、主人公と同名の敏子という固有名詞がありながら、作品の中ではほとんど「女」という言い方で呼ばれているのは、このような特性を、女性一般の特質と捉えている作者の考えが反映しているよう。

「保吉の手帳から」(大12・5)の「午休み——或空想——」には、保吉が毛虫の会話を立ち聞きするシーンがある。そこには、「毛虫は互に頷き、彼のことか何か話してゐるらしい。保吉はそつと立ち聞きすることにした。／第一の毛虫 この教官は何時蝶になるだらう？ 我々の曾曾曾祖父の代から、地面の上ばかり這ひまはつてゐる。／第二の毛虫 人間は蝶にならない

のかも知れない。／第一の毛虫 いや、なることはなるらしい。あすこにも現在飛んでゐるから。／第二の毛虫 成程、飛んでゐるのがある。しかし何と云ふ醜さだらう！ 美意識さへ人間にはないと見える。／保吉は額に手をかざしながら、頭の上へ来た飛行機を仰いだ」とある。いずれ蝶になる毛虫の視点から、先祖代々地面の上ばかり這い回り、いつまでも変態しない人間を相対化して捉えている。

そこにやって来た「同僚に化けた悪魔」は、処世上のつきあいこそ大事だと笑う。理性が軽んじられ、現実はやりきれないと思つていたら、いつか保吉は「腰の曲つた白頭の老人に變つてゐた」のである。保吉の社会や人生への不適応が、空想を通して示されている。

また、「砂利の上に蜥蜴とかげが一匹光つてゐる。人間は足を切られたが最後、再び足は製造出来ない。しかし蜥蜴は尻つ尾を切られると、直に又尻つ尾を製造する。保吉は煙草を啣へた儘、蜥蜴はきつとラマルクよりもラマルキアンに違ひないと思つた。が、少時眺めてゐると、蜥蜴は何時か砂利に垂れた一すぢの重油に變つてしまつた」とある。尻尾の切れた蜥蜴から、ラマルクの用不用説に拠るものだと連想したが、実は亡くなつていたというものである。ここにも芥川が現実の真相を見る際に、進化論の学説などが反映していたことが窺える。

「新緑の庭」(大13・6)では、擬人化されたものたちの十三

の台詞が並列されており、桜や椎や竹などの植物が十二で、あと一つが石である。苔が「起きないこと？」と問うと、石が「うんもう少し」と答えているところに、この作品の特質がある。<sup>注5</sup>有機物の苔が、無機物の石に生命活動を開始しないかと問いかけ、石もそれに答えるところに、この作品のメルヘンらしさがある。

無機物の石が有機物になることはあり得まいが、ここでそれを指摘する必要はあるまい。あくまで新緑の庭を一つのメルヘンとして捉えたもので、生物学的な実態を越えて、生の躍動を表現しようとしたのであろう。

「鷺と鴛鴦」(大13・7)には、通りすがりの若い二人連れの女性に憧れた後、再度電車の中で見た際の幻滅の悲哀が描かれている。そこには、「鴛鴦は顔を下から見ると、長ながと鼻毛を伸ばしてゐる。鷺も亦また無精をきめてゐるのか、髪の毛は一通りではない。それ等はまだ好いとしても、彼等の熱心に話してゐたのはメンスラティオンか何かに関する臨床医科的の事実である。爾来じらい『夏の女の姿』は不幸にも僕には惨憺たる幻滅の象徴になつてゐる」とある。女性特有の生理現象を話してこゝとが極度の幻滅を覚えさせているのである。女性へのロマンチックな幻想の対極にあるものとして、動物的なものをいかに嫌悪しているかが窺える。

時代順に、芥川の活動を更に見ていきたい。対談「芥川龍之介氏との一時間」(大14・2)の中で、芥川は「僕に言はせれば人間的と云ふことの一部は、好色的と云ふことですな」と述べている。人間について性欲を免れられない存在として捉えていることが分かる。

「望むこと一つ——私がもし生れかばるならば——」(大14・

勉 3)の中で、「もし本当に生れかばるものとすれば、人間より下等な馬か牛に生れかばる。そして何か悪いことをして死ぬ。さうすると、神だか仏だか知らないけれども、兎に角、さう云ふものが僕を、馬や牛よりも下等な雀か鳥にするだらう。それが又悪いことをして死ぬと、今度は、魚か蛇にするだらうと思ふ。それが又悪いことをして死ぬと、今度は蝶々とか蚯蚓とか云ふものにすらうと思ふ。それが又悪いことをして死ぬと、今度は松の樹や苔こひなどになるだらうと思ふ。それが又悪いことをして死ぬと、今度はバクテリアになるだらうと思ふ。そのバクテリアが悪いことをして死んだ時に、神だか仏だか何かさういふ知らないものが、一体僕を何にする了簡だらうと思ふと、ちよつと馬や牛に生れかばつて、順々に悪いことをして、死んで行つてみたいやうな気もする」と述べている。ここには輪廻転生による生命の連鎖がイメージされている。悪因悪果を逆方向

にたどることで、生命の進化の過程を逆に遡るということがイメージされている。しかも生命発生の原初の姿はどんなものであったかということに興味を示されている。

進化論や仏教的な因果応報の教えを踏まえながら、生命体というものへの根源的な志向がイメージ化されている。このような発想をすることで、他の生き物に対しても同じ命あるものとしての同胞という意識が強くなっていると思われる。

因みに、大石道夫『DNAの時代 期待と不安』(平17、文藝春秋)に拠ると、「二〇世紀の初め」「親から子へ性質が伝わる現象を研究していた学者(遺伝学者)」は、「タンパク質の働き背後にはそれを操る黒幕がいる、と信じていたのだ。タンパク質は単に黒幕に操られる手先、よくいえば実動部隊に過ぎない」と捉えていたことが分かる。このような生命活動を操る「黒幕」がいるという当時の考えは、芥川の「神だか仏だか何かさういふ知らないもの」によって、人間を含むあらゆる生き物の生命活動が操られているという考えに反映しているだろう。人間の生と死について、その意味を模索し、定義し続けようとした芥川だが、その背後に人間を超越した存在を意識していたことの生物学的な要因とも言えよう。

芥川編集の英語教科書「THE MODERN SERIES OF ENGLISH LITERATURE 序」の「第五巻の序」(大14・4)の中に、「Butlerを見れば、これはDarwinの進化論を駁するにNeo-



Lamarckismの進化論を以てした、憂々たる独造底の思想家である。Shawは彼の進化論を——この巻に収めた“Darwinism and Vitalism”の思想をButlerの進化論の中に発見した。即ち併せて“Darwin Among the Machines”の小論文を加へた所以である。なほ次に附言すれば、Butlerは“Life and Habit”等進化論に関する諸著」があると記している。バトラーについて、ダーウインの進化論に反対する際に新ラマルク説を以てした独自の思想家であり、『生と習性』等の進化論に関する著作があると評価している。併せて「ダーウイン説と生氣論」や「機械の中のダーウイン」を収録した理由を述べている。英語教科書にダーウインの著作を収録した理由を述べているのであるが、芥川がダーウインやラマルクに関心があつたことも示している。大正十五年四月二十五日の渡辺庫輔宛書簡に、「僕は女房や子供と鶴沼の東屋へ来てゐる。好學心もなければ性欲もなし。鬱々たるばかりだ」とある。同年七月十日や十一日の小穴隆一宛書簡では、性欲の増進に効き目があるとされる媚薬の「スパニツシユフライ」を持つて来てくれるように頼んでいる。昭和二年一月十六日の齋藤茂吉宛書簡には、「来世には小生も砂に生まれまし。然らずば、来ム世ニハ水ニアレ来ン軒ノヘノ垂氷トナルモココロ足ラフラン」とある。「砂」や「水」といった無機物に転生したいという願望が切実に綴られている。同年の三月二十八日の茂吉宛書簡には、「唯今の小生に欲しきものは第一に動物

的エネルギー、第二に動物的エネルギー、第三に動物的エネルギーのみ」と記している。

昭和二年に書かれた未定稿の「夢」では、画家の「わたし」はモデルの女について、「この女は人間よりも動物に似てゐる」と思う。「わたし」と「彼女」の会話の中に、「誰でも胞衣をかぶつて生まれて来るんですね?」「つまりないことを言つてゐる。」「だつて胞衣をかぶつて生まれて来ると思ふと、……?」「……」「犬の子のやうな気もしますものね。』とある。哺乳類の生物学的な特質を踏まえて、ヒトの存在が相対化して捉えられている。

夢の中では動物的な存在の彼女を扼殺するが、それが事実かもしれないという不安なままの結末である。未定稿ではあるが、作品としては完成の域に達していると言える。女性的な存在への不信感が強すぎるとして、発表を控えたのであろうか。

アフォリズムを収めた「僕は」(昭2・2)の中に、「僕は度たび他人のことを死ぬば善いと思つたことがある。その又死ぬば善いと思つた中には僕の肉親さへゐることはない」と記している。肉親愛、あるいは家族レベルでの利他主義にも懐疑的であつたことを示している。

また、「僕はいつも僕一人ではない。息子、亭主、牡、人生観上の現実主義者、氣質上のロマン主義者、哲学上の懷疑主義者等、等、等——それは格別差支へない。しかしその何人かの僕

自身がいつも喧嘩するのに苦しんでゐる」とも記している。ここに列挙されたもので、「牡」以外は、すべて社会生活上の、あるいは知性的な人格上の側面を表している。そのために、かえって「牡」が際立ってしまう。動物の要素を持つ「牡」の側面に、いかにこだわったかが窺える。

「僕は樹木を眺める時、何か我々人間のやうに前後ろのあるやうに思はれてならぬ」とある。同じ命あるものとして植物を直感的に捉えるところがあつたことを示しており、これを単なる幻覚とは捉えない方がよいだろう。その次に記された「僕は時々暴君になつて大勢の男女を獅子や虎に食はせて見たいと思ふことがある」という言葉には、他の動物に食わせることで傲慢な人間を戒めたいという願望が綴られているのも、それを証していよう。

「河童」(昭2・3)では、哲学、芸術、宗教、戦争、遺伝、恋愛など多くのことが風刺や批判の対象となつてゐるが、本稿の論旨に添うところを中心に見ていきたい。

河童の宗教について、「一番勢力のあるものは何と言つても近代教でせう。生活教とも言ひますがね」とラップは述べる。この後「生活教」について、「単に『生きる』と云ふよりも『飯を食つたり、酒を飲んだり、交合を行つたり』する意味です」という説明が付け加えられる。更に、河童の長老は、「雌の河童の脳髓を取り、雄の河童を造りました。我々の神はこの二匹の河

童に『食へよ、交合せよ、旺盛に生きよ』と云ふ祝福を与へました」と述べる。

「河童」における「食へよ、交合せよ、旺盛に生きよ」という言葉は、『旧約聖書』「創世記」の「生めよ、殖えよ、地に満てよ」<sup>註6</sup>を踏まえていることは、関口安義の『河童』論(菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介研究』所収、昭56、明治書院)等によつて既に指摘されている。

ただし、関口はこの論の中で、「現実の世の煩わしき、生活苦・病苦・人間関係のやり切れなさを克服し、旺盛に生きるところに近代教の特色がある。それは『不可解な、下等な、退屈な人生』(『蜜柑』)を越えるものとして意識されているのだ。面倒で複雑な人生の諸問題は、『生命の樹』を礼拝することによつて、『成し能はないことはない』こととなり、すべて解決する。こういう新興宗教じみた『近代教』の本質がここに姿を現すのである」と「近代教」を肯定的に捉えているところも見られる。また、久保志乃ぶ「芥川龍之介『河童』」(宮坂覺編『芥川龍之介作品論集成 第6巻河童・齒車』所収、平1、翰林書房)の中には、「『生活教』を享樂的・物質的な教えとみなし、それを否定しているのだと見る」とあるが、どうであろうか。長老自身は、妻との不仲のせいもあり、生活を大事にするという「生活教」を信じてはいない。トックやラップにしても「近代教」をありがたがつてはいない。「近代教」の寺院の内部で偶像化さ

れ聖徒にされていたのは、自ら死を選ぼうとした厭世家が多かった。種の継続に奉仕するような形で生を全うする普通の生き方とは違って、自己の苦悩のままに独自に生きた人が聖徒にされていたと言える。「旺盛に生きよ」とは、動物的に生きることの意味し、ここでは風刺的に描くために使われているだろう。個人の知性への尊厳よりも、種の存続のために生活を重視せよといった在りようへの批判が、「生活教」という形で、パロディとしてイロニカルに表出されているだろう。

河童の世界における宗教のことに仮託しながら、人間社会で尊重されている生命活動そのものを風刺的に捉えている。人間を含めた動物の生活も大半が「食へよ、交合せよ、旺盛に生きよ」という繁殖に捧げられており、遺伝子の中にプログラムされているとも言える。だが、単純にこのことを肯定できない芥川にとつて、このような建前の言葉に懐疑的になり、むしろ芥川を呪縛する言葉として作用していたと見ていいだろう。

「河童」の世界では、胎児は自然発生的にこの世に誕生するのではなく、個人の主体的な判断で生まれて来るかどうか決定できる。ここにも個人の主体性と遺伝子のプログラムの二項対立がある。人間の誕生そのものをどのように意義づけるかということについて、このような形であえて問いかけている。人間の世界では、遺伝子のプログラムに従って出産に至ることを当然としているが、河童の世界ではこの世に生まれて来るかどうか

ということについても、個人の考えが尊重されている。それは、哲学者マツグの書いた「阿呆の言葉」の中に、「我々は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化してゐない」とあることから窺える。河童よりも人間の方が、動物的な要素をまだ残しているというのであろう。なお、「阿呆の言葉」の中には、ボオドレエルの人生観においては性欲が大きな要素を占めていたとあるが、マツグは食欲もそれに劣らず重要だと記している。動物的な本能にいかにかこだわり、人生がいかにかそれらに呪縛されているかを示している。「阿呆の言葉」は、種の存続につながることへの、知性の側からの敗北を綴っているともとれる。

ラツプが「虫取り董が咲いた」と呟いたら、ラツプの妹が「雄の河童を掴まへると云ふ意味」に誤解する。植物の花は、動物の生殖器の役割を果たしており、そのような寓意が、この部分には働いていよう。子孫を残すということでは、動物も植物も似たようなものだという意識も窺える。また、男女が番うことは、妹や母にとつて好ましいことなのに、ラツプがそれに否定的ともとれる発言をしたことが、「食つてかか」られた要因となつていよう。

腰の周りを覆わない河童が、腰の周りを隠す人間を笑う。こんなことをあえて「河童」の中で採りあげているのは、性のことや種の存続にまつわることが、人間の世界では隠されることで神秘化されているが、あえて種や遺伝子の存続といった隠さ

れたところのペールを剥ぎ取り、白日の下にさらしたいという願望があったからであろう。

主人公はラツプから、「遺伝的義勇隊を募る！ 健全なる男女の河童よ！ 悪遺伝を撲滅する為に 不健全なる男女の河童と結婚せよ！」という言葉を聞かされる。更に、人間社会において「令息が女中に惚れたり、令嬢が運転手に惚れたりするのは何の為だと思つてゐるのです？ あれは皆無意識的に悪遺伝を撲滅してゐるのですよ」と言われる。恋愛や結婚において作用する要素を、遺伝との関わりで捉えているところが独特である。しかも人間の世界では、それが無意識のうちに行われているが、河童の世界では、それが目的をもつて為されるべきであると記されている。どちらの世界も、このように種を継続する中で、遺伝的に平均化されると捉えている。

「或旧友へ送る手記」（昭2・7）の中で、「我々人間は人間獣である為に動物的に死を怖れてゐる。所謂生活力と云ふものは実は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いた所を見ると、次第に動物力を失つてゐるであらう。僕の今住んでゐるのは氷のやうに透み渡つた、病的な神経の世界である」と述べている。人間の「生活力」というものを、食欲と性欲に基づくものとして捉えていたことが窺える。どちらも遺伝子にプログラムされたものであり、「神経の世界」の住人にとっては、認め難いものであった。「『生きる為に生き

てゐる』我々人間の哀れさを感じた」ともあり、生存のための生存となつており、人間としての尊厳は脇に追いやられていてと嘆いているのである。

「闇中問答」（昭2・9）の中に、「四分の一は僕の遺伝、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然——僕の責任は四分の一だけだ」とある。芥川自身注7の成人してきた過程において、境遇・偶然を重視しており、それぞれ四分の一と捉えている。中でも、両親や先祖からの遺伝的な要素も四分の一と捉えており、母親の狂気については、保因者であるという意識が強かつたと思われる。また、知性的に主体的に判断できる部分は、わずか四分の一しかないと捉えている。

問答の中で、「或声」が「お前のしたことは人間らしさを具へてゐる」と言うと、「僕」は「最も人間らしいことは同時に又動物らしいことだ」と答える。すると「或声」は「お前のしたことは悪いことではない。お前は唯現代の社会制度の為に苦しんでゐるのだ」と言う。人間も社会も、まだ進化の途中にあるという認識が強かつたことが分かる。「人間という種の誕生以来ずっと変化せずに続いてきた『社会のプログラム』というようなものは、存在していないのではないか」というような、すべては進化の過渡期にあるにすぎないという認識が、芥川には強かつたと思われる。

『侏儒の言葉』（昭2・12）の「恋愛と死と」の章に、「恋愛の

死を想はせるのは進化論的根拠を持つてゐるのかも知れない。蜘蛛や蜂は交尾を終ると、忽ち雄は雌の為に刺し殺されてしまふ」とある。蜘蛛や蜂の雄が受精後に死を迎えるように、ヒトの恋愛についても、受精によつて子孫を残せば死ぬという生物進化の原型が含まれているかもしれないと捉えている。

「天国の民」の章には、「天国の民は何よりも先に胃袋や生殖器を持つてゐない筈」とあり、「悲劇」の章には、「悲劇とはみづから差づる所業を敢てしなければならぬことである。この故に万人に共通する悲劇は排泄作用はいせつさようを行ふこと」とある。食欲や性欲や排泄という動物的な要素から解放されたいという、芥川の痛切な願望が窺える。

「池大雅」の章には、「大雅は玉瀾を娶つた時に交合のことを行はなかつたかも知れない。しかしその故に交合のことを知らずにゐたと信ずるならば、——勿論その人はその人自身烈しい性欲を持つてゐる余り、苟くもちやんと知つてゐる以上、行はずにすませられる筈はないと確信してゐる為であらう」とある。池大雅について記しながら、交合のことを、人間の知識に属することではなく、動物本能と捉えていることが分かる。いくら浮世離れた池大雅でも、免れられないと捉えているのである。「池大雅」の章では、知性よりも本能を重視するのが一般の人々の考えであると捉えている。本能とは、遺伝子のプログラムと言ひ換えることもできる。

これらの章には、食欲や性欲に呪縛されて生きることを拒否しようとする芥川の姿勢が鮮明に表出されている。

#### 四

既に挙げた明治四十四年の山本宛書簡に示されているように、種の保存のための人間存在なのかという疑問を、芥川は生涯にわたつて持ち続けたと思われる。因みに、種の保存と密接に関わる遺伝子については、一九五三年にワトソンとクリックがDNAの二重らせん構造のモデルを提唱して以来、遺伝子の構造から働きに至るまで分子レベルで追究されるようになった。ドーキンスは『利己的な遺伝子』の中で、遺伝子について「彼らは自己複製子であり、われわれは彼らの生存機械なのである。われわれは目的に仕えたあげく、すてられる。だが、遺伝子は地質学的時間を生きる居住者である。遺伝子は永遠なのだ」と述べている。分子生物学が現在のような成果を出す以前に、芥川は鋭い観察と思索によつて、人間が種の継続に仕える存在にすぎないのではないかということ、真相がある程度まで認識し、作品の中に取り込んでいたのである。

芥川にとつて、人間的であるということは、動物的であるということと知性的であるということの二項対立する要素を持つていた。それは遺伝子に組み込まれているものと個性的なもの

との対立と言い換えることもできるし、養老の『唯脳論』の視点を適用すれば、身体と脳の対立と捉えることもできよう。

ところで、「近代」社会を支える理念として、人間中心主義・合理主義・科学主義といった認識の枠組みが形成されつつある時代の中で、芥川はそれらの意義を認めつつも、現状については懐疑的であった。生命体としてのヒトは一体何者で、どうしてこのような生活をし、このような社会を作り上げているのかという根源的な問いがあった。

芥川は人生や芸術に、整っていかも固有な美しさを求めた。しかし人間社会は種を継続して足りりとして、厭うべき動物的な側面によって成り立っていた。しかも人間社会においては、そのような生活に密着したことを、処世術や生活の知恵として尊重する風潮さえあった。

芥川は固有で崇高な生に憧れたが、種つまり遺伝子を主体として考えれば、そのような固有であるはずの人生でさえ、種の継続に奉仕している一つのバトンにすぎない。「生物学的に見ると、人間を含めた生物がこの世に存在するのは、自分のDNAを子供に引き継ぐという厳肅たる生物学的な役目のためである<sup>注1</sup>」  
 というような考えは、芥川には承服しがたいことであった。芥川はエゴイズムをあばいて描いただけでなく、人生は種の保存に奉仕するためにすぎないのかという思いがありながら、一方でそれを否定したい思いもあった。だが、そのような鳥瞰的と

も言える客観的な視点を持つことで、かえって人間を含めた生き物の実相を冷酷なまでにリアルに表出し得ている。死に呪縛された人生にすぎないという認識を強く持つことで、かえって「生のやうな花火」(「舞踏会」)、「刹那の感動」(「奉教人の死」)等の表出を確かなものにしたことも間違いあるまい。

遺伝子を残すための人生には懐疑的であった芥川だが、死後の作家としての名声にはこだわりを持つていたことは、「河童」や「闇中間答」からも窺える。これは、文化的な遺伝子であるミームへのこだわりと言い換えることもできる。ミームは人の脳が進化して以後、人間だけに固有に存在するとしてドーキンスが命名したものである<sup>注2</sup>。芥川の人生そのものが、いかに現世の動物的な要素を嫌い、後世にまでつながる知性的な要素にこだわったかを如実に示している。自裁して果てた芥川は、自ら死を選択したとも言えようが、芥川が死してもなお、その文学は、時代を超えて継続して読まれている。芥川が願ったように、個人の作品であり思想でありながら、それが個を超えるミームとなつて普遍性を獲得している。

注1 「青年と死と」の末尾に、芥川自身が「龍樹菩薩に関する俗傳より」と記している。

注2 養老は『唯脳論』の中で、「ヒトの活動を、脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的に眺めようとする立場を、唯脳論と呼ぼう」と述

べている。

注3 「なる可く愉快な小説」(「あの頃の自分の事」)

注4 木下清一郎『心は遺伝子をこえるか』(平8、東京大学出版会)

注5 山田篤朗「新緑の庭」(志村有弘編『芥川龍之介大事典』平14、勉誠出版)には、「植物を擬人化し、新緑のさわめきを植物たちの井戸端会議のような、にぎやかなおしゃべりで表現している」としか言及していない。

注6 芥川は「本年度の作家、書物、雑誌」(大8・12)の中で、『旧約聖書』のこの言葉に言及している。

注7 『河童』でも、河童の長老は、「我々の運命を定めるものは信仰と境遇と偶然だけです。(尤もあなたがたはその外に遺伝をお教へなさるでせう。)」と述べている。

注8 日高敏隆『人間は遺伝か環境か? 遺伝的プログラム論』(平18、文藝春秋)

注9 大石道夫『DNAの時代 期待と不安』

注10 ミームについては、ドーキンス『利己的な遺伝子』やスーザン・ブラックモア『ミーム・マシーンとしての私(上)(下)』(平12、草思社)等に詳しく記されている。

[付記] 芥川の本文の引用は、『芥川龍之介全集』(平7〜10、岩波書店)に拠った。